

全柔連だより

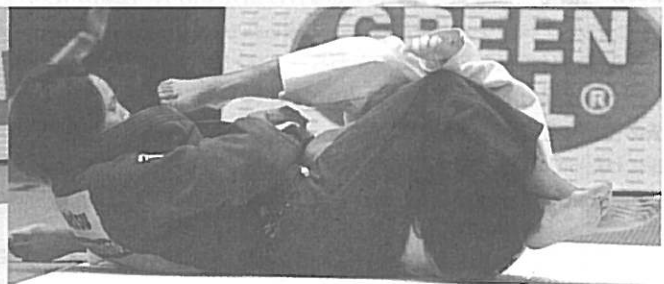
題字/嘉納行光

●発行人/上村春樹 ●編集/広報委員会 ●発行/財団法人全日本柔道連盟(<http://www.judo.or.jp/>)



2012年ロンドンオリンピックに向け、日本選手団始動

2012年ロンドンオリンピックを翌年に控えた本年。2011年5月から2012年4月までの国際大会で得るポイントは、オリンピック出場資格に100%カウントされる。最も重要な年となる2011年度に向けて、吉村和郎強化委員長に話を聞いた。



全日本柔道連盟 強化委員長 吉村 和郎

2011年度は2012年ロンドンオリンピックにつながる年であり、オリンピック出場資格を獲得するためのポイントは、2011年5月から2012年4月までの国際大会で獲得した得点が100%カウントされる(その前の1年間は50%をカウント)ため、最も重要な年になる。また、2011年度最大の目標大会は8月にフランス・パリで行われる世界柔道選手権大会である。2010年度は世界選手権大会(東京)において過去最多となる男女合わせて10個の金メダルを獲得した。男女ともに篠原信一、園田隆二両監督の強化策が実り、ベテランと若手を競わせたことが上手く相乗効果をもたらしたのだと思う。

しかしながら、世界の競技レベルはそんなに簡単には、日本に金メダル独占を許さない状況にある。昨今、世界選手権においてはメダル獲得の分散化が進み、先の大会でも22か国・地域がメダルを獲得している。その中で複数の金メダルを獲得したのは日本とフランスである。また、金メダル以外で複数のメダルを獲得したのは7か国・地域である。このことから、いかに世界各国・地域の競技レベルが平均化しているかがわかる。過去の強豪国だけではなく、中央アジアやアフリカ等の新勢力の台頭もあり、以前のように一つの国が金メダルを複数個獲得できるようなことは難しいかもしれない。そして、この状況下で日本に金メダルを独占させまいと、世界中で日本包囲網が張り巡らされていると考えて良いと思う。今は各種の国際大会等でのVTRは勿論のこと様々な情報が氾濫している。しかし、このような状況下においても我々日本は、確実に金メダルを獲得しなければならないし、その準備には万全を期して行っている。

2月に欧州の国際大会を戦ってきたばかりであるが、2010年度の

国際大会の成績を分析すると(2011.02.14現在)以下ようになる。

【男子】

2010年全出場大会における日本の金メダル獲得割合

日本が出場したIJF大会20大会、140階級(無差別を含まず)において37個(26.4%)の金メダルを獲得。延べ208名の日本人選手が出場しており、およそ5.6人に1人が金メダルを獲得している。

2010年グランプリ大会(GP)以上の出場大会における日本の金メダル獲得割合

IJF大会のうち、GP以上の11大会、77階級(無差別を含まず)において24個(31.2%)の金メダルを獲得。延べ139名の日本人選手が出場しており、およそ5.8人に1人が金メダルを獲得している。

【女子】

2010年全出場大会における日本の金メダル獲得割合

日本が出場したIJF大会18大会、125階級(無差別含まず)において56個(44.8%)の金メダルを獲得。延べ199名の日本人選手が出場しており、およそ3.6人に1人が金メダルを獲得している。

2010年GP以上の出場大会における日本の金メダル獲得割合

IJF大会のうち、GP以上の11大会、77階級(無差別含まず)において39個(51.0%)の金メダルを獲得。延べ136名の日本人選手が出場しており、およそ3.5人に1人が金メダルを獲得している。

国際大会には、1・2番手以外の選手や若手も起用している。厳しい状況下において、しっかり結果を出してきていると思う。この大会成績と内容を十分に分析・検討し、2011年度も昨年以上の結果を出し、ロンドンオリンピックへ向けた強化を徹底して行っていきたい。